

向上する東欧の動物福祉水準



向上する東欧の動物福祉水準

第5回国際コンパニオンアニマル福祉会議は、NCDL (英国犬保護連盟)、及び、ノースショア国際動物連盟の後援により、2002年11月中旬にプラハで開催され、40カ国から270名の代表が参加しました。

東ヨーロッパは、共産主義崩壊後、急速に変化を遂げ、チェコ共和国のような旧ソ連圏の国の多くが近い将来EU (欧州連合) 加盟の予定になっています。様々な分野で西欧の水準に追いつくことが求められる今、動物福祉も重要課題の1つなのです。

5日間のプラハ滞在中、迷い犬／猫はただの1匹も目にしませんでした。(丸々と太った2匹の「準野良猫」がプラハ城で観光客を出迎えてくれましたが、あの子たちを除けば……) 街を散歩する犬と飼い主のコミュニケーションは、見ていて実にほほえましい光景でした。どの犬も手入れが行き届き、しかも、良くしつけられています。殆どがリードをつけずに散歩し、飼い主はやさしく愛撫しながら、一緒に遊んでやっています。

プラハにはなぜ野良犬／猫問題がないのだろう……車で30分の所にある市営のシェ

ルターを訪問した時に、その謎は解けました。5年前、チェコ動物管理局はシェルターの経営とデザインを研究するため、英国を訪れました。その結果、化学工場の跡地に近代的で広大なシェルターが誕生するに至ったのです。診療所とオフィス以外に「ウェルカムセンター」を備え、そこには、来訪する市民のため、里親を募集する動物の写真が展示されています。「殺さずに、すべての動物を受け入れる」主義のシェルターで、150頭の犬と80匹の猫を収容可能ですが、私どもが行ったときには、犬120頭、猫は26匹だけでした。年間、約3000頭の犬が持ち込まれますが、リホーミング率は100%を誇り、「咬みぐせのある犬」も、責任ある飼い主の所に引き取られるそうです。(猫は、90%がリホームされます。) 32名のスタッフの中には、獣医



ティアと職員が、広い運動場で定期的に散歩をさせたり、遊んでやったりします。昨夏、プラハに大災害をもたらした水害は、河の近くにあるシェルターにも影響を及ぼしました。しかし、動物はすべて高台に移されて、無事だったということです。犬を飼っている市民が義務として納める登録料



師と獣医学専門技師が2人ずつ、動物行動学者1人も含まれています。犬は、ポラン

をシェルター運営費に当てています——スタッフの給料のほかに、(迷い犬／猫についての電話相談を受けたり、動物問題を扱う) 動物管理局職員の報酬も、ここからまかなわれます。彼らは、また、野良猫のための(ワナで捕えて、不妊手術後、元の所に戻す) TNR計画も進めています。

ほんの5年前まで、野良犬／猫を捕獲して殺すことが目的の、みすばらしい収容施設しかなかった市が、まさに百八十度方向転換し、ペット飼育と動物福祉について、近隣の北ヨーロッパに負けない高水準を目指し、成果を上げているのは、実に驚くべきことです。

報告者：ジリアン・ナカツジ、
エリザベス・オリバー

